プログラム・ノート

奥田佳道

7年プロジェクトの旅も後半を迎えた。国内外のステージで創造の喜びを分かち合い、アニヴァーサリー・イヤーを迎えたフォーレ(没後100年)、スメタナ(生誕200年)への想いも尽きない。楽しげな楽の音、澄んだ響き、悲哀に満ちた調べが舞う。葵トリオ、さあ登場だ。

ベートーヴェン:ピアノ三重奏曲第4番 変ロ長調 作品11「街の歌」

鍵盤のヴィルトゥオーゾとして喝采を博し、作曲家としては早くも変奏に冴えを見せていたルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770〜1827)若き日の「肖像」を聴く。1797年、楽都ウィーンでは宮廷楽長ヨーゼフ・ヴァイグルのオペラ『船乗りの愛または海賊』が流行っていた。とくにアリア「仕事の前に Pria ch'io l'impegno」に歓声が飛んでいたようである。ベートーヴェンはその調べを最終第3楽章の主題としたピアノ、クラリネット、チェロのためのトリオを書く。クラリネット・パートは――ベートーヴェンの編曲もあり――ヴァイオリンで演奏されることが多い。

愛称の原語はGassenhauer(ガッセンハウアー)、小径の流し、流行歌という意味である。

フォーレ:ピアノ三重奏曲 ニ短調 作品120

音楽出版社デュランの勧めに応えて1922年から翌年にかけて書かれたガブリエル・フォーレ(1845〜1924)芸術の昇華で、1923年5月にパリでの国民音楽協会公演で初演、賞賛を博す。その翌月にはフランスの近代音楽史に光り輝くステージもあった。アルフレッド・コルトー、ジャック・ティボー、パブロ・カザルスが奏でたのだ。

古典的なフォーマットに息づく透明感あふれる響き、かぐわしい叙情美、そして最終第3楽章に添えられた軽やかな躍動感への賛辞は尽きない。

スメタナ:ピアノ三重奏曲 ト短調 作品15

決然とした調べも悲しみを浄化させたかのような楽の音も素晴らしい。無窮動的に、何かに駆り立てられるかのように推進する場面も用意された。経過句的なパッセージにも寄り添う哀歌風のフレーズや舞曲の情趣も私たちを喜ばせる。

チェコ国民楽派の祖にして匠のベドジフ・スメタナ(1824〜84)が、1855年、31歳の年に作曲、後に若干の改訂を施したピアノ・トリオを聴く。創作の頃、スメタナは幼い娘を相次いで失くしている。

内に外に烈しいこの曲は1855年11月、プラハでスメタナのピアノ、ドイツの歴史的なヴァイオリニスト、ケーニヒスロウ(またはケーニヒスレウ)、ゴルターマンのチェロにより初演された。別の場所で聴いた鬼才フランツ・リストが賞賛したものの、当時は構成がラプソディックに過ぎると見なされたのか、出版は遅れに遅れた。

葬送行進曲風の調べから熱きエンディングへ。最後の創りも胸をうつ。

(おくだ よしみち・音楽評論)